

# 髻判官

別名  
衣川

シテ 義経の霊

ワキ 旅僧

所 奥州衣川

次第

「ある歟なきかの仮の宿。く。泊りは焉くなるらん。

ワキ詞

「是は一所不住の僧にて候。我此程は奥州衣川に居住仕候。猶々古跡を尋ね。無縁の者あらば廻向せばやと思ひ候。

道行

「焉くにも心はとめじうき雲の。く。空の名残は有明の。月をもかさね日を暮し。行も帰るも道芝の。少時が程はみちのくを。めぐり果ざる旅寐

かな。く。

詞

「不思議やな。是成松の木の陰に。髻を切捨置たり。何者歟発心の法体執趣の跡成らんと。立寄是を見んとすれば。

シテ詞

「なふく御僧。其髪のあたりへな立よらせ給ひそ。

ワキ

「不思議の事を宣ふ物かな。扱いかやう成事にて候ぞ。

シテ

「其髻は源家の大将九郎判官の髻なり。敵の所縁あ

るゆへに。あだをなさんと髻を。道のほとりにす  
て置給ふ。それを知らざる人。是をとらんとす  
れば。太刀風といふ風吹来て。其身を破り截断す。  
かまへて立寄せ給ひそ。

ワキ、カ、ル

「是は不思議の御事かな。かく告給ふ御身はたぞ。

シテ詞

「名乗らずと終にはしろしめさるべし。御身貴くまし  
ませば。かりにあらはれ来りたり。

カ、ル

「あとよく弔らひおはしませ。

同

「名乗らずとてもみちのくのく。く。いはで忍ぶは  
えぞ知らぬ。かまひてうたがひ給ふなよ。彼太刀  
風をふかせつゝ。真の姿ま見えん。恐れ給ふな御  
僧と。語りもあへず失にけり。く。

ワキ詞

「扱は義経の亡霊仮にあらはれ給ひけるぞや。

カ、ル

「いざや御跡弔はんと。みちのくのとふのすがごも  
敷妙の。く。ねられぬまゝに夜もすがら。さも  
すさまじき。此野べに。御法をなして待居たり。

く。

地「不思議や松風あらく吹て。嶺洞ひゞき風雨頻に。  
こゝろもすぎきありさまかな。

同「其時よしつね顕れ出で。く。我讒臣に亡し故に。  
其恨み残つて。敵の所縁にあだをなさんと。はく  
れい今に悩乱せり。

シテ「かゝりける所に。

同「かゝりける所に。黒雲の如くなる。煙団虚空に飛

来つて。彼方此方をまろび飛て。かけ廻りしが。  
式つにわるれば靈魂ひかり。颺ふき渡るや太刀風  
の。草を薙つ。水を逆卷梢をちらし。是ぞ古へ判  
官の。刃の鋒さきおれ残つて。太刀風と変満し。  
恨みをなしける恐ろしや。すはや修羅の。時も来  
にけりと。判官は則ち火焰を放ち。修羅道に入ら  
せ給へば。その太刀風の今も残りくゝて。恨みを  
なすとぞ聞えける。

底本…国立国会図書館デジタルコレクション『古今謡曲解題』丸岡桂 著  
『宴曲十七帖 謡曲末百番』国書刊行会 編